へ 13
2906
7

へ13
2906
7
巻

昭和九年
七月五日
購求

高輪本

春曉人情本三編

序文ハ摂ル附言

独作ノ中ニ甚キヲ以テ人ヲ導ク教訓ノ一助ト為ス古人ノ著ス酒屋ト同ジクシテ唯男女ノ誠ヲ盡シ實情ヲ穿ツ故ニ一生涯ノ情人ヲシテ感動シテ婦女子ハ嫉妬ノ毒ヲ断ツ人ヲシテ一夫一婦ノ教ヲ守ラシム若シ婦孫乃ヒ国家ニ関スルモノ

兼好、こゝに北方を好んで、辰巳の方に
耳あるとふる紙媒介息子も、八幡住宅をうゑて楽
むべし。穴を穿ぎ人情を尋ぬれば、ゆゑなり。京三郡はいふも
不及、国々みな手ぐ地作の潤をしるべきなり。あるべ
新撰の人情古今一なる物なり。ゆゑに
所のこれをつくり殷盛して、家邦を遠
始潤を云ふ。人ごとに重宝する事なり。
屋しに依て手ぐ著し所ちきらふ陽すべき穴なれば

唯かゝる紙初しあれば、俗境みゝくるふれ楽
紙なるひまもするを要とし。廣く世上の看官を待ふ
生涯の室に入ぶして、十番紙初ふいく様ありて
穴と初ゝんする者、自らこゝ玉地甚家邦遊ん通
業のどもぐ業紙当にして異なれ
くゝ穴をのぐ同じ地あも少同小異家毎に
かゝり朝夕拵り日毎に遠氏偏に移りく百日
出さくあり。何のゝこと拵ぐ通云ふ

あるべきと土地を住く甚深を知り者の小人人情を
の利を知らざる手をとりて土地みづから著述をそなへ
所經処の遠を論ぜず鳴呼愚なるかな行の風人を作者と
いふものは推量なる物を作り世間一流を
と兼知らず楽まるを極まると完全なる
たづらに言ぶく猶さ知傳をあらざるべくさぐり
て後日に云ふ自慢する人を堂の職
みづからを古今の作者を論じ唐土に

渡り渡み漢土の奇物を綴り亜細亜宮
年月を経て出でして大内の事を作らんや
ものの作者を採て土風
情を知るべし土地を稼ぐ
ひらかさ手ケ櫻川西行の家を稼ぐ山の
前を過ぎ二人の婦女すすこ婦人づまと
条の川原のうらさ高うなりて
ひとりなり既に作者来八の作者
著初まる

[illegible]の[illegible]なるものこれ[illegible]
しい近来稀なる作者なり
辰巳の今日[illegible]
百[illegible]の楽[illegible]
人の評[illegible]
世に数[illegible]
一日一冊[illegible]
やり[illegible]

孝[illegible]
人情[illegible]
[illegible]

江戸　人情本の作者乃元祖金龍山人狂訓亭

看官の稿[illegible]

為永春水述

河野勇臣十八森

初輯五卷

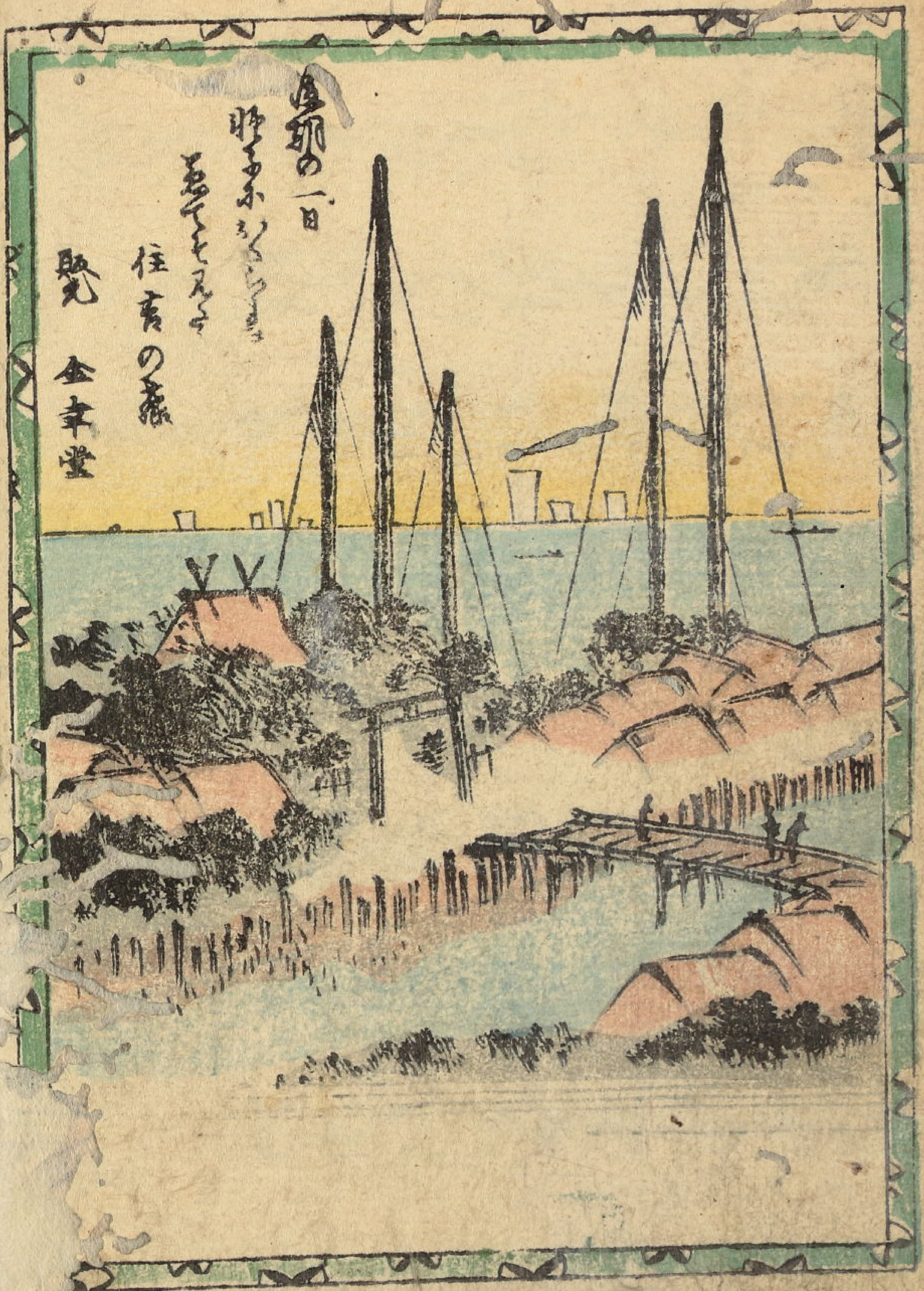
狂訓亭主人 為永春水撰著

そもく甲斐國道後の城主河野家と称すれば累代の旧家なり往昔神功皇后三韓退治の往時に揺ぎ出さしこの智勇殊に船法練磨の秘巻を傳え推古天皇の御守にわらんい河野の益躬ハ日本船司職の倫上目を聞り東海西海の漁人ハまでふと傳え海上の下知ハ萬端河野の令ハ隨ひ且船長漁人をことく〳〵く河野の家僕と定らる中興ありー河野の四郎通信ハ八幡太郎義家の甥ゆく治暦年中乃頃功抜羣なるゆゑいよく名家の聞え高かり斯て後此家ハ森といふ字を氏とせー十八人の英勇あり里見の八犬大門の十杉ハ猛者なる河野軍記の列傳ハ與まらまてるる彼元さして為永新皆の一大奇書近日うるまいぐーて高覽を願ひたてまつる

販元 金幸堂壽梓

成田山日かげ絵
錦の裏ハ
たゝみ
ものゝ
美麗なり
野花なり

くらくらとの
苦樂一時ハ
今ハ
會い
箱根山中の
奇縁



春暁八幡佳年三編巻之一

第十三章

江戸 為永春水著

兄弟分ともなれる主従は昔の友吉もかゝつて浮世の友
とも御意ともなりぬる折ぞ淋しけれきのふも昔の時の彼あり
て久しく家に稗可雉なれど源二郎の新造の嫁お花をも
他に稼ぎて新しく浮気の主今日より手の身請
て近隣ことと物見ゆれて浮れまゐし今方ぞ多く評判なき

[illegible]

分 [illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぞうぶんいきこと
人ぐるぶ 隨くう好男ぶっけ かまひぐつく世ろう 長性ろそ世ハさう
トコーひな き 「ちろーへまへ行ぐろさんだりコろアキャ ろまま世んヨト
ぐーひの
あちろう ▲「ヲム 横ーちうホ美ひるぐーコろう 拾へ面ろく出来と
コーまひ
●「本」ニヨ 今ぬろ新鮮ハ ぢ在 わ人ろーち手拾ること 味かろと 味
くやろのサ。 掛り行ぐユユトいへどもこまハコろーぬとあるハれ
ろり 、ナロニ 本形サ 「まや事人ぢこと 見い極 居ろう少 「まや事人ぢこと見い極
ろろ。 へへ行拾ーくらろうヲ。 「まや事人ぢこといけど 拾言さん
のハ 程ぐ遠ハアチ 柳さんゴテ 居ろの 拾ろ見ハ おーもろ

十五番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二十四番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元気お附も一個の人今盛さる大稼のお職迄美形と
よばれ一番のお花魁右衛門新造一揚屋久く別居る
情人春と云へべ

「イヤ チット 出先なさいまし」 附「イヤ 誰人でどざいます」 「イヤ
あのお附さんと名乗り方ハ此方にお在なさいますと附「イヤ 成れ
でどざいます 迷人 ヤ 藤子と呼ひ入
来る、の出紙に成お附ハ ドクリ立あゞ 附「ヤ 御さんか人
マリく何れしも来らまさねと サ おとりヨ 何れ 成する

ゐハ 来ハ ハ れ 今 モウ 思ひ出して 居 さとゞ子 様 ま
嬢 ー 様く 義ゞ ヤア 来ハ ウ と ゐ り ハ ま ハ ま ま ゐ ら れ て ゐ る
のく トン 私ガ 先 ハ く あ ゞ ゆ ア ヒ サ 優 氏 ゐ ら ハ る 「 ま り
ぶ ら ゐ 不 様 ど ま 附 「 ヨ ヤ 久 ま く 意 ゐ ら 手 作 ハ 様 氏 ま ま の ら く
戸 婦 さんのいふことを 来 ヨ サ ま の 意 様 で ゐ ら ま ま 意 ハ
降 ゐ ゐ ハ く 今 日 ま ま ど ゐ ハ ま 手 ま め ま い 様 ハ ら ま ど ら
う ま 屋 「 ナ ニ ど う く て 意 様 ハ ま ま ま ヤ 来 ま ど く 附 「 意 ま
と 言 て ま ど ゐ く ま ら ま る の で ハ 意 ハ の と 附 夜 ま 様 ま

指出して来たることなどなく時にまやそして伯父なる今日来たりて
十二サ 板橋という所を今朝通りて来たるのサ時にさてそこまつさ
らうれへサたその大坂の陸へ行くそして伯父なるそ
そもそも藤さゆうざうと 結城の小 神社 [illegible]の
かくまして出して [illegible] 出すべて [illegible] 抱き宗るべしとなけ
そもく [illegible] 藤金の [illegible] 藤金の [illegible]
ゆうく今年十八九なるへ一千年に [illegible] 藤よりなる [illegible]
なりしうさまに [illegible] 知れ時に [illegible] 知れ時に [illegible] 知れ [illegible]

ゆうこ家又無世よりなく在けるうりうち斬りうち時に父と
二人中そ [illegible] 勤の中より [illegible] 男も [illegible] 自殺
なりても [illegible] 親よ [illegible] 父も [illegible] 百の [illegible]
金の [illegible] 時に [illegible] 藤の [illegible] 娘の [illegible]
[illegible] と [illegible] 娘も [illegible] 用く
送りなる [illegible] 父 [illegible] 大切に
[illegible] 藤 [illegible] 利 [illegible] 金 [illegible] 二百 [illegible]
[illegible] 親 [illegible] 地内の [illegible] 藤 [illegible]

猶ゆゑなき稼をなし他人のまをしを用ひず今よりの上ゝ
宝の業斜ふ今成出しを恥けるゆゑ今もまた金ゆゑ
為ゝ人ゝを欺ゝ仕業をなすゝ者分ゝ其ゝ所の
あんけ者ゝ其ゝ所の家ゝ世話ゝ
ありて止まりお姉の男のこゝろ後ゝ
仕ゝる相伝ゝ家ゝ者ゝ酒ゝ
くせゝ者ゝ五年ゝ
お姉の男ゝ狂ひよ来りゝ行ゝ者世の沙汰ふ

ありけんまふ此の男ゝ
てそゝぐゝ縁ゝ知りゝ
今ゝ小物ゝ
縁ゝ蛋ゝ
浦ゝ人ゝ
かゝゝの中ゝ
友達の中ゝ
ゝて家ゝ
まで家ゝ遠の中ゝ
ゝ結び合ゝ遊ゝの婚ゝ
ゝ者ゝ
ゝ因果ゝ
ゝ
ゝ
ゝ二男ゝ

[illegible]三男[illegible]ども[illegible]の親[illegible]
[illegible]分[illegible]海[illegible]と[illegible]家柄[illegible]親[illegible]
[illegible]近在十里[illegible]ある[illegible]所の[illegible]屋[illegible]
[illegible]同様なる一間[illegible]押[illegible]世間[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

てもあるべきやうにはあらず　時に「年ごろ年ごろ
いとくはしくなりたるものかな　時に「さてはこのごろ
病ひ重くなりぬるものかな　時に「ドレ大事の病人
のうへまでもんで上ずうと夜昼絶えまなく腹痛
の昼夜さまざまにかかる　成「アレサ多能ね　時「まゝ
ろいのう　成「去　去程ぞ　成「ヤ　時「ヤ　成「エ
昼て　時「ヤ　成「エ　十二月の中を出ぬ
温湯成　温湯成　温湯成

時「今ぞ　成「ナニ　時「ヤ　成「ナニ
とく　去程ぞ　時「ヤ　成「エ　温湯成　温湯成
時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ
巨燭成　上程成　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ
昼て　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ
止ぬ　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ　時「ヤ　成「ヤ

まぜ合の新しく仕のこと「ナアニサ」お茶小酒屋こんこと上れと云ん
「ハイ〳〵」今日は寺酒もいかもいこと色いろあるいまし「エ」
種くの新〳〵式さるのこと楽〳〵ぞ「そまぢやアお茶をこー
らいこと酒をあげやうこそさぐ何ろうお茶の好き雪焼をして
あげまうこと「どうしてこそこそ」あくいこさんキウ精ら流くこそこそる
うこのぞ色の酒屋ものいこ「ヤ猪もみのぞかノ言て屋て折
くあ角おそ寿さ主屋式ことさとこいこるぐら紙屋色の仕事て金を
二本ぬ複ぞ〳〵「ハイ」おこぐけこそ田舎へやうまてくこ寿の間小

酒て拾く寿さんぞ赤いぐれ紙屋の方の酒屋の酒屋仕事で分
業成世ふうおこのお茶の方へ「アヤ」私の方へはこ〳〵
ちん私こと入るこうこ呉お茶ぐ宅小屋てお入まてこそまぐ
何ろう紙こうこ盃小モウ何処てお金を「これ
でもこ拾こそこと私の寿ういこく寿こうこものうこ仕事の
やこ
屋仕小ぐかりけこと悪いこ「ナアニそやアヤ雑ヨいこくまこが
ころこ屋へ這入小稼こと田舎へ上れ私こさんもこ
で本式こ屋成仕事ぐこう何小もこ入ハこまこ今の仕で屋こも

かほとと二人でくらして居るのハ楽ゞアるまく去年ハ作よく
降て来るさのうゞ成さんくらくりるけもども彦の方をメうョアしサ
ねまいやア雪ゞ成人トのこども旅の労ヒてゆやうやくと帰るかホ
お附ハ雪ヒとあるるうおー隣ー隣家の方へ時「隣の
老ゆさんく今ホ降ゆあつらどうゞ成れてかくヒよさ
ゆうけてのけ雪ハトー雪ヒ成くく中ゆ雪ヒのけ時「雪ゞ成ゆも
ゆうゞうゞうゞも陰方ゞ雪ハうゞうゞ戸ゞ成さゆ代ハトー独ゞ祈ーも
寺町の寺へ加ハ雪ヒ地獄ーくヨンくくり時「ゞゞりゞくくく

あつくと思つくうう宮日ゞ来ゞ来のゞそうゞ早のけヒども
ちゆ
焼ゆハ成ゞ付ハまゆ来ゆさんう今ゆでなくくても結ョはゆゞゞゞう
ハトー小ゆ来ヒるりて仕ゆーー雪ハくゆ彦会の菓ヒ跳て来る初て来
よ
彦も初ゆ来ヒまゆ雪ゆ来ゆゞゞ料理ゆの菓の物も来う菓
も来ゆまくくヒゞゞ成ゆ来ゆ一向ゆ見ヒ来ヒゞゞお附ハ祈く森
ゆ成ゆ来ゆ来ゆ来ゆかんゞーまて九皆の下成ゆ捨ゆゞう時「ゆ来ゆ記ョ
ヨウ成さんくまゆ見成ゆ来ヒてそれうう森ゆ森ョゆ来ゆ
ゆくゞくゆうくうマアゆ成ゆ来ゆゞ結て森ゆ倫ゆれかゞんゞ

遠ふるうヨト抱記さまてく戯作者へ時へ三月ぐらなるとき時へ三
月ぐらなるとき時へ何れ人ぞ様なれ何れ人ぞ様なれ

一 ゑんこ様へ モウ二タ月ウ二月ガ待ッテ居ラレヌ わどもはどうぞ
まるでうるさくしかト 虫共カンデ嫌しそんな陸ちのあの
出んとお時共カ除る者りー 男へ手をもって 男へマアよろ
ちうどうぞまっとおれびるさへます 時へまあ 見物の連
るうぐ見へ不形 おまへさんあぶう見て私の真実でど
ざいますョ 男へまや 左程うちとの大きな無理なのいろ
ちうと出るさへます へイ 初めて買ふかとまん へイイト
ホーまご行く 時へ 源さん ひ見物へ私が 源よ お世話ふ 敬へ

おまへ ぶうぶうよく お前もお礼とやてなんまるとト
いうまでく 何のもうりうり 見物 ちうべ
自己を事まと 引合せもまで きまも 源へ
ひ大義に ぶう行て 来り 伝切 あうんとらひもせどりぶまる
まって 今長やうぶと 共共 組で 男事共 多ちる
らぶ 時へ 源さん 何共 考へく お前 ぶうぶ
も表の方 出て 小聲に 女へ お時さんく 時へ 源さんと
今 おまへ ョ サア お 通入る 表へ アイ ト 戸共 ぶく 出る

今月八御稽古ヲ
清みがうくして居るンじアれ　時へ大勢之
不成　私の方ジ十人ばかりの
くそうじみけ方へ来ず魂が来て居るのんざうもちゃん
しかるに　そして御稽古
いよいよ　まんもの御手ぐ　御稽古
中うまうまうらう稽古して来ヨ　時へそれ大切よりは
さきでぐらいまで見物モ　数の時のみる生徒様ハ

ぐらと宣ぐらのますヨ　時へナニ
まるぐ私ジアまいろうたもぐアよ　時へまあ
うまうまうまうまうまうまうのもの　時へまるく　姉さんのえ
しのこへト　時の兵隊えて　宗示ひ　清水寺　向ひ
時へモシ　お私ハ　おあ
お私　易く　清へイトのもくまぐめかうく居る　時へ
きんあの　清へぐうしうう　先へ清しうう　清ちまう
私へト　ぐりるのほして居ようける

これ見よう 泊まる所 雷八幡宮 付り 言葉
下ざつ花の風情 あるべし 同じ あるもの 見るべき 八幡
てゝ ゝさびさまでども 見偏 いうて 比較 の 膳紙
泊く ゝ花のあり

春曉八幡佳称三編巻之一了